

京都市動物園のアジアゾウ 5 頭における社会関係

川口 唯菜

【序論】集団を形成するヒト以外の動物にも、集団における中心的な個体が存在することが知られている。特に野生下のゾウでは、matriarchと呼ばれる最年長のメスがそれに該当する。京都市動物園の4頭のアジアゾウ(*Elephas maximus*)の集団を観察した亀山(2019)は、他個体との接近行動や接触行動に基づいて、最年長のメス(冬美、当時10歳)が集団で中心的な役割を果たしていたと結論づけている。2014年にラオスから来園したこれら4頭に、2019年11月より同園で長年飼育されてきた1頭が加わり、2020年現在では5頭集団を構成していた。本研究では、この5頭集団の社会関係を亀山(2019)と比較するとともに、(1)中心的な個体がいるのか、(2)性成熟を迎えた秋都が繁殖行動をしているか、という2点について検討した。

【方法】京都市動物園で飼育される5頭のアジアゾウ、美都(推定49歳、メス)、冬美(12歳、メス)、春美(10歳、メス)、夏美(10歳、メス)、秋都(8歳、オス)を観察対象とした。本研究は5頭集団が形成されてから9カ月後の2020年8月5日から開始し、12月1日までの30日間に、個体追跡サンプリングと行動サンプリングによる159時間の観察を行った。

【結果・考察】(1)中心的な個体は、接近行動と接触行動と近接の相手として、どの他個体からも高頻度で選ばれる個体だと考えたとき、5頭集団で中心的な個体となる可能性が高いのは、美都(5頭集団での最年長メス個体)と冬美(約3年11カ月間構成された4頭集団での中心個体)と考えられた。美都と冬美の間では、美都は冬美への、追いかける、押すなどの攻撃的な行動があり、2頭の近接率は2.2%と5頭間の中で最も低い値であった。よって2年前の4頭集団では中心的な個体とされていた冬美が、現在は美都と対立していることが示唆された。春美、夏美、秋都の3頭による接近行動と接触行動からは、その相手として選択される頻度に美都と冬美の間で偏りは見られなかった。春美と秋都は冬美よりも美都との近接が多かったが、夏美は美都と冬美のそれぞれと同程度に近接していることが分かった。以上のことから、2年前の4頭集団とは異なり、現在の5頭集団では中心的な個体を特定できなかった。(2)2018年から2020年にかけての秋都の近接率は、春美とは12.3%から16.6%、夏美とは18.5%から29.0%と増加したのに対し、冬美との近接率は26.0%から6.4%と大きく減少した。また、秋都がマウント行動と追いかける行動を行った相手は、春美と夏美だけだった。ゾウのオスは成体になると集団から出て単独で生活しながら繁殖相手を探すため、繁殖行動を行う年齢になると秋都が単独でいることが増えると予想される。しかし、秋都が単独でいた割合(48%)は、他の4頭が単独でいた割合(平均49.2%)と同程度であったことから、秋都は性成熟を迎えているものの、まだ繁殖を行う発達段階に達していないことが示唆された。よって秋都は春美と夏美に社会的な興味を向けているものの、現時点で秋都がどの個体とも繁殖行動をしているとはいえないかった。(比較行動学)